

## 平成18（2006）年度発展途上国研究奨励賞の表彰について

アジア経済研究所は、昭和38年以来、発展途上諸国の経済などの諸問題に関する優秀論文の表彰を行ってきた。昭和55年には、「発展途上国研究奨励賞」として、この領域における研究水準の向上にいつそう資することを目指して、その対象を社会科学およびその周辺の調査研究事業の著作全般に拡大した。表彰の対象は、前年の1月から12月までの1年間にわが国で一般に入手できる形で公開された図書、雑誌論文、文献目録などで、発展途上国の経済、社会などの諸問題について研究し、また分析したものである。

平成18（2006）年度は各方面から推薦された57点を選考したが、最終選考で下記の作品が選ばれた。表彰式は7月5日に当研究所において行われた。

### 受賞作

『複雑適応系における熱帯林の再生 違法伐採から持続可能な林業へ』

（株御茶の水書房）

関 良基（せき よしき 財地球環境戦略研究機関客員研究員）

### 選考委員

委員長：中兼和津次（青山学院大学教授） 委員：遠藤健（朝日新聞社論説委員），白石隆（政策研究大学院大学教授・副学長），寺西重郎（日本大学教授），原洋之介（アジア科学教育経済発展機構理事長），藤田昌久（アジア経済研究所長）

### 最終選考対象作品

最終選考の対象となった作品は受賞作のほか、次の3作品であった。

王 京濱著『中国国有企業の金融構造』 （株御茶の水書房）

川端 望著『東アジア鉄鋼業の構造とダイナミズム』 （株ミネルヴァ書房）

駒形哲哉著『移行期中国の中小企業論』 （株税務経理協会）

関 良基 『複雑適応系における熱帯林の再生  
違法伐採から持続可能な林業へ 』

しら いし たかし  
白 石 隆

本書は、ルソン島イサベラ州の商業伐採が終わった熱帯二次林生態系において、新規入植者の社会（「伐採フロンティア社会」）が生態安定的なシステムを構築するに至るプロセスを、フィールド・ワークに基づき、詳細に分析した力作である。

ここで力作というのは大きく2つの理由による。第1に、本書は、ある特定のディシプリンを専攻してア priori に問題を措定するのではなく、フィールド・ワークの中でみずから発見した問題をさまざまなディシプリンによりつつ、どう理解し、どう説明するか、格闘している、その格闘の軌跡が本書のいたるところに残っており、それが本書の若々しい記述をもたらししている。第2は問題そのものの重要性である。本書で取り上げられる問題はフィリピンのルソン島イサベラ州だけに特有のものではなく、インドネシアでもマレーシアでもさらにはそれ以外の世界のさまざまな地域でもおこっているし、また将来、おこりうる。本書はそういった問題

に個別事例の観察を超えたなんらかの一般性をもつ方策を探り出そうとしている。

本書の基礎となっているような調査は決して容易なものではない。そういう調査を長期にわたって実施し、政策的意味合いの大きい事例を見つけ出し、それを事例の著述を超えた知見に発展させている。それが本書をアジア経済研究所発展途上国奨励賞にふさわしいものとしている。

ただし、ひとつ付言しておけば、選考委員会は、本書において理論的枠組みとして採用された複雑適応系の妥当性を評価しているわけではない。選考委員会の討議においては、このような理論的枠組みを援用することによって、本来もっと重視されるべき論点、事実が逆に十分、検討されなかったのではないかと強い懸念が表明された。これからの研究においては、理論的にもっと柔軟に研究を続けられることを期待することとしたい。

（政策研究大学院大学教授・副学長）

受賞のことは <sup>せき</sup> 関 <sup>よしき</sup> 良基

私が研究を始めた当時、熱帯林の未来は限りなく暗いように思えました。東南アジアの熱帯林消失に関するポピュラーな学説は、商業伐採活動とともに伐採道路が敷設され、開拓入植者たちが流入して伐採跡地はとめどなく破壊されていくというもの。私自身、調査を始めた当初はこうした悲観的な見方をしていました。

しかし、ルソン島のシエラマドレ山脈の伐採跡地で開拓民たちと生活を共にしながら調査を続けるうちに、破壊から持続可能な生業への転換が可能であると気づきました。イサベラ州の北部シエラマドレ山麓での調査期間中、違法伐採者たちが、人工林育成林業への転換を、自ら選択していく様子を目の当たりにしたからです。

この転換プロセスにアプローチするため、私は複雑適応系のシステム理論を用いました。持続可能な生業構造の生成過程は、臨界状態に陥ったシステムにおいて、逸脱が正のフィードバックを受けて増幅し、新しい秩序を生み出すという複雑系であることに気づいたからです。調査地での構造生成は、天然資源の残存状況、木材価格、林野保有権の協同組合への付与、政府の違法伐採規制、技術伝播など、複数の要素の相互作用の結果でした。ここで特定のディシプリンから個別の要素に焦点を当てる還元主義的な分析を行えば、フィールドの現実を正しく記述できないと思いました。そこで私は、自然環境・市場・制度・人口圧といった外的諸要素の変化に対し、地域住民は生業・組織・規範・技術といった文化的内的要素を変革させながら適応していくという、総合的な複雑適応系アプローチを試みたのです。

この異端のアプローチを評価して下さった審査員の先生方に心より感謝を申し上げます。私は現在、中国の植林現場で研究を実施中です。本書のアプローチの有効性を別のフィールドでも示すことで期待に応えていく所存です。

略歴

- 1969年生まれ
- 1994年 京都大学農学部卒業
- 2000年 京都大学大学院農学研究科博士課程修了 [2002年に京都大学博士(農学)]
- 2000年 早稲田大学アジア太平洋研究センター助手
- 2003年 早稲田大学現代中国総合研究所リサーチアシスタント
- 2004年 (財)地球環境戦略研究機関客員研究員(現在に至る)
- 2005年 同志社大学社会的共通資本研究センター客員フェロー(現在に至る)

主要著作

著書

- (共著)『フィリピンの環境とコミュニティ 砂糖生産と伐採の現場から』明石書店 2000年。
- (分担執筆)「東南アジア熱帯における造林戦略 農家造林と政府造林のどちらが有効か?」『東南アジアの環境変化』法政大学出版 2002年、139-159ページ。
- (分担執筆)「『生態移民』に頼らない森の再生」小長谷有紀・シンジルド・中尾正義編『中国の環境政策・生態移民 緑の大地、内モンゴルの砂漠化を防げるか』昭和堂 2005年、97-124ページ。
- (単著)『複雑適応系における熱帯林の再生 違法伐採から持続可能な林業へ』御茶の水書房 2005年。

論文

- (単著)“Internal Constraints on Community-Based Forest Management in a Post-Logging, Upland Community.” *Philippine Quarterly of Culture and Society* 28(4) 2000: 399-437.
- (共著)“Forest Sustainability and the Free Trade of Forest Products: Case from Southeast Asia.” *Ecological Economics* 50(1-2) 2004: 23-34.